

# 広島大学蔵刊本『源氏物語抄(紹巴抄)』

## 箒木卷の書入れについて

— 翻刻と考察 —

妹 尾 好 信

(はじめに——付・凡例)

広島大学附属図書館が所蔵する刊本『源氏物語抄(紹巴抄)』は無刊記の製版本であるが、全二十冊のうち第一冊目に、上部欄外から行間にかけて注釈の書入れが多数ある。書入れは『細流抄』をほぼそのまま引き写したものであることが内容から明らかである。これは、各冊の見返し書から知られる。この本の旧蔵者である願正寺において書き入れられたものらしい。願正寺は、新潟県西蒲原郡巻町角田浜に現存する浄土真宗の寺である。見返し書によればこの本は相当大事にされていたことがわかる。近世後期に、都市から遠く離れた日本海沿いの浜辺の寺で『源氏物語』の古注釈書が読まれ、はじめのほんの一部だけとは言え、他の注釈書の注が書き入れられたというのは『源氏物語』享受の実態を知る上で非常に興味深いことと

思う。同本に関して詳しくは『広島大学大学院文学研究科論集』第六三巻(平成十五年十二月)所収の拙稿「広島大学蔵刊本『源氏物語抄(紹巴抄)』の書入れについて」に述べたので参照されたい。そこでは、刊本『紹巴抄』諸伝本における広島大学本の位置付けを明らかにするとともに、桐壺卷の部分の書入れを翻刻したが、紙数の制約から続く箒木卷の部分の書入れは省略せざるを得なかった。そこで、本稿では箒木卷の書入れを翻刻し、若干の考察を加えた。翻刻は、次のような方針によった。

- 一、書入れは墨書であるが、項目(『源氏物語』本文の引用部分)の頭に丸印と合点、終わりに句点が朱で付されている。翻刻では合点と句点は省略したが、丸印はそのまま○で表わした。
- 一、項目の頭の丸印がない場合は、私に頭に・印を置いた。
- 一、項目部分はゴシック体で記し、注釈部分との間を一字空けた。
- 一、注釈部分は、漢字は原則として通行の字体に改め、読解の便宜のため適宜句読点を付した。
- 一、上部欄外から書き始める通常の注と異なる低い位置にある注は、区別するために頭に▽印を付して一字下げて示した。
- 一、『細流抄』にない独自の注には、末尾に※印を付した。
- 一、書入れに脱落があると認められる場合は「内閣文庫本細流抄」の本文によって補い、その部分を「一」で括弧して示した。
- 一、その他、必要事項を適宜( )内に注記した。
- 一、各注には末尾の( )内に通し番号を付した。

〔翻 刻〕

- 源氏十六歳。桐壺巻には十二歳の事までしるすと見えたり。但同巻の奥におとなに成給ひてのちはとつき、又さとの殿は修理職たくみつかさに宜旨くたりてになふ、あらためつくらせ給ふと有。然は十三四五の年の事は桐壺の奥にこもり侍へし。巻名、河海に籀木の心もしらの哥の所委くしるさる。はゞき木と云名は総して源氏一部の名にかけてみるへき也。一切衆生のあるかとすればなきありさまによくかなへり。桐壺巻は序分までいりたゞす。此巻物語の序分也。作者の本意、盛者必衰のことはり、此題号におさまれり。凡苴子が胡蝶の夢の詞も此ありなしにおなしかるへし。世間は只籀木にはしまりて夢の浮橋におさまるみるへき也。(一)
- 光源氏名のみことくしう 河海に名のみことくしうと読きるへきよししるせり。可然。但読つゝけてもくるしからざる也。人をそしるよりいへはいかなる名人もいひけたるゝ物也。是世間のありさま也。弘徽殿の方さまよりは云けたれ給ふと也。されとも只公界へかけてみるへきにや。とかは好色也。又何事に付てもなり。(二)
- すきこと共 すき事とは好色也。花鳥、光源氏といふ名をすき事とはいへると云々。此儀は如何。かくろへ事とはしのひたる事なるへし。花鳥、高麗人に相せしめ給し事云々。是も又如何。(三)
- 片野の少将には 給けんかしといふまで物語の作者の惣論也。か

- た野の少将説々あり。物語の名也。清少納言枕草子にも見えたり。心は、片野の少将は天性好色をうへからたつる人の事也。此源氏の君は「うへはさはなくてしたに好色の心あると也。(四)
- また中将などこゝより双紙の詞也。今源氏は「括弧内脱落当官中将也。給し、此し文字は過去のし文字にては聊心得かたき様なれと当代の事をも如此書事常の事也。(五)
- さふらひようして 居よくして也。(六)
- ・おほいとものには 葵上の御方也。桐壺巻にもうちすみのみこのましうおほえ給と有。(七)
- しのふのみたれやと 内裏にてはいかなるみたれ心もあらんと葵上かたには思疑へると也。花鳥、藤壺の女御に心かよはし給事と云々。是はさしつめたるやうなるにや。(八)
- ▽○さしもあためきめなれたる 花鳥、めなれたるは葵上の事也と云々。此義不可然。此段は悉皆源氏の君の本性をあらはし侍也。源氏の心くせにて心つくしにわりなきふしをこのみ給と也。源氏の君一生涯の心はせをあらはず也。(九)
- なかる 花には六月と有。只五月可然。(一〇)
- なかる 久しく居也。(一一)
- ・御むすこの君たち ひきいれのおとゝの子息たち也。(一二)
- ・御とのゐ所 源氏のとのゐ所也。(一三)
- ・宮はらの中将 後に致仕のおとゝ也。桐壺御門の御いもうと、三宮の御腹也。(一四)

○右のおとゝの 弘徽殿の後の妹也。此おとゝの四君此宮はらの中将にあはせ給也。此君も物うくしてとは、此四君をはさしも思給はてあたまき給へは、源氏の襲上には心とゞめ給はぬおなしやう也となり。(二五)

・おさく 此詞所によりて用かふる也。(二六)

○をのつからかしこまりもえをかす へたてなくむつひ給ふゆへにをのつから礼儀をもわすれてともなひ給ふと也。かしこまりもえをかすは無礼なる様也と也。是則しなされための物語なとうちとけたる事のはしめにかけるなるへし。(二七)

○御とのゐ所 桐壺の事也。(二八)

○おほとこのなふら 又はおほとこのあふら。いかさまにかいてもよむ時はこのふらとよむなり。(二九※)

○ふみともなと見給 此文は書籍也。(三〇)

▽○かたはなるへきも 其中に見くるしきも有へき也。下の心は興有文をはかくし給ふ心也。(三一)

○色くのかみなる文 是は艶書也。(三二)

▽○をしなへたるおほかたのは 只大かたのは中将などの我身の上下にもかきかはしてみ待ると也。(三三)

○をのかしゝ 我く也。みつからの心さしのまゝに也。(三四)

▽○八雲抄云、ワレくアル心也ト云々。(三五※)

○えんすれば うらむる也。(三六)

○おほそう 大概也。ウチハナチタル也ト云々。※(片仮名書ノ部)

分『細流抄』(二ナシ)(三七)

・二のまちの心やすき 第一にかくし給にてはあるましき也。つきにてあるへきと也。(『紹巴抄』ノ項目)二の町(二次ノマチノ心也)ト傍書(二八)

○そこ(こそ)そこは足下也。源氏此中将をさしての給也。(二九)

○御覽し所あらんこそ 中将の詞。(三〇)

○これはしも 只これはといはんため也。し文字はやすめ字也。(三一)

○うはへはかりの 手をかく事也。大かた手なともきたなけなくかきて事たかひたるやうなる人也。(三二)

○そもまことに そもはそれも也。撰出していはんにはかたきとなり。(三三)

○わか心得たる事はかり 我はと思ひて人をなにもなく云也。女の常のくせ也。(三四)

○まとのうちなる 人のむすめのよそのきこえあるほとなり。(三五)

○たゝかたかとを 哥をもよみ琴をもひき手をもかくなと一ふししいつる事のあるをきゝつたふる也。凡此品定はたれとなく皆世にありとある人のありさまをいへり。されとも少々は此物語の中に

ある人の性に引あはせて見也。こゝは未摘の琴など引給と聞て源の心をとり給る也。(三六)

○をのつからひとつゆへづけて 自然一芸はたれもしいつる事ある也。(三七)

○みる人をくれたるかたをば 人の媒介するくせにて、種々の其身によきはかりをとりいたして云たつる也。(三六)

○それしかあらしと さはあるまじきと推察するまでの事はたれもなき物也。(三七)

○まことかとも見もて行きくことになふやうなることはなき物なれば、とにかくに世間にしかるへき女はなきそとてうちうめきたる也。(四〇)

○いとなへてはあらねと我も 我もとは源氏也。(四一)

○いとさはかりならん 一向なる人の所へはすかされもよるまじきと也。(四二)

○とるかたなくくちおしき 下品と上品とは同じ物なるへし。最下品と最上品とはかすすくなきと也。されは中品に人の心はみゆへしと也。(四三)

○人の品たかく 上品の人は自然にかくる事もおほきと也。(四四)

○しもかしなに成ぬれば 下品の人の事は人のとりあくる事もなきは耳にたつ事もなき也。まへの詞のとるかたなく口おしきとはとすくれたるかすすくなしと云ことはをのへたる也。(四五)

○そのしなくやいかに 源氏の詞也。三品には何とわくへきそととひ給也。(四六)

○もとのしなたかく 上品の人の身をもちさけたるを云也。くらのみしかくとは選叙令にも位のみしかきと云に卑の字を書たり。位のいやしき也。(四七)

○またなを人の なを人は直人也。種姓不貴人也。諸大夫などの時をえて次第に昇進して公卿などまてなりのほる人也。此二の品分別してかたきと問給也。(四八)

○左の馬のかみ 此問答の最中に兩人參也。(四九)

○いときにくき事 是は物語の作者の詞也。(五〇)

○なりのほれ共 右馬頭の申也。まへの二の品を評也。当時なりのほる人をは世間からきのふけふまでのさしもなき人そとおもひへとすてに昇進などしあかれは云おとすへきにもあらずと也。(五一)

○さはいへと されとも思ところはある也。惟光か女藤内侍のすけなどにあたり。(五二)

○またもとはやむことなき 是は種姓よき人のおとろへ給をいふ也。末摘などにあたる也。まへには琴など引給しわさを云とて末摘を云也。こゝは其身の有さまに比する也。兩段は中の品なるへし。(五三)

○すりやうといひて 軒はの萩の類也。まへのなを人と云類なるへし。国の守は一任四か年つゝにてかはるを人の事にてとは云也。吏務を司る人なるへし。參儀の兼国と云、権守也。(五四)

・けしうは けの字清也。(五五)

・えり出へきころをひ 当時受領の女しかるへき時分なるへし。(五六)

○なまくのかんたちめ なまくとはなまなりなる也。公卿など

になりたる人也。中納言参議ほとらひの人也。(五七)

○非参議 参議にもあらず三位四位たる人也。(五八)

○もとのねさし 明石入道にかなへり。(五九)

○いとかはらか さはやかなる也。(六〇)

○家のうちに はぶかすとは何事も省略せず也。(六一)

○まはゆきまで 明石上の類なるへし。(六二)

○宮つかへに 桐壺の更衣にあたり。(六三)

○すへてにきはしき 源の語也。所詮は富るによるへしと也。家の内にたらぬ事となかめるといふにあたりての詞也。(六四)

○こと人のいはん 中將の詞。源は好色の身にしてかくの給は似あはざる也。(六五)

○もとのしな 馬頭詞。此段女三の宮によくあたり。朱雀院鍾愛の皇女にてましませとも、御手なともうるはしからず心もをくれたる所まします也。(六六)

○うちあひてすくれ やむことなき人のおほえもあり心もちるもしわさもうちあひしかるへき人也。是はもとよりの事也。薄雲女院にあたり。(六七)

○心もおとろくまし 是はもとよりかくこそあるき事なれば心もおとろくましきと也。(六八)

○なにらへをよふへき なにかしは右馬頭自身をさしていふ。然共身にとりて上品をは申かたきと也。(六九)

・さて世にありと人に 夕兒の上あたる也。(七〇)

○ちゝのとしおひ 此段は種姓させる人ならぬ人の中にも可然人あるへきの心也。(七一)

○かたかとも かやうの中にもとり所あるへき儀也。大かたをしなをしにすてかたきをはいかゝとなり。藤式部かひもうとの類也。(七二)

○いてやかみのしな 源氏の心の中也。葵上は父は左大臣、母は御門の御いもうなればこそ上の品とも云へき人たにも、源の御心に思所有やう也。君とは源氏也。(七三)

○しろき御そ 源のありさまをいふ。(七四)

○なをしはかりを 夜陰なれば知音の中にてはさしぬきを略して直衣はかりを引かくる事勿論なるよし一条禪閣の説也。然とも直衣には必下にきぬをかさぬるもの也。こゝにはきぬをかさぬるをなをしはかりとは云也。さしぬきを略する説はあまりなる歟。(七五)

○そひふし 添臥。花説可然。(七六)

○女にみためまつらほし 女に我なりて見たてまつりたきと也。又説源を女になして見たきと也。此詞末の巻にもあり。(七七)

○このためには 源のためには上か上をえらひあらまほしきと也。(七八)

○大かたの世に 右馬頭詞也。我物と撰定へきはかたしと也。(七九)

・おとこの大やけ 此段簡要也。此人こそ世のかためともなるへきとてとりいたすへき人はかたき事也。(八〇)

・されとかしこしとても されとも天下万機の政は官々職々有てつかさとする物也。かしこしとて一人してする事はなき也。されは上は下にたすけられ下は上になひきて大事とは云なから何ともなりて行事也。(八二)

・せはき家 家中は人ひとりのはからひにてゆつるかたなければ大事なる也。此あるしはうしろみすへき女あるしの事也。うしろみなくて家中はおさまりかたき也。(八三)

▽ソヘニトテトハサアリト思テトスレハ又カ、リト也。世中ノサマ也。抵注云、ソヘニトテトハ我コ、ロニ物ヨリヤウゲシタル心也。サヤウニシテヨカラント思ヘハチカヒサラハ又カヤウニセントスレハ又タカフコトアル義也。(八三)※

○とあれはかゝりあふさぎるさ 花鳥、そへにとは本のことつけそへたる荷を云。世俗におも荷にこつけといふ事也。人のあつらへ物なとあつかりてあなたこなたへとするは、をのかわつらひになる心也と云々。如何。顯昭云、あふさとはあふさまなり。きるさとはきさま也。とさまかくさまといふ心也。とするもかくするもあしといひしらぬわさかなとよめり云々。京極黃門同之也。とせんとするもかくせんとする。あちこちへ物のちかひたる也。そへにとてとは只詞也。さありと思てすれば又かゝりと也。世間のありさま也。荷にはあらず。後撰に、けふそへにくれさらめやはと思へともたへぬは人のこゝろ也けりも此詞に同賦。(八四)

・ソヘニハサラハト云コ、ロと云々。後撰ノモサラハナリ。又サニ

モト云コ、ロモアルヘシ。(八五)※

○なのために 大かたは子細なき人也。なのためは十分せぬ詞也。大かたなといふ心也。(八六)

○かならずしもわかおもひにかなはねと 少々心にかなはぬ女をもすてかたたく思男の事也。此詞男女のうへのみならず君臣朋友のましはりに勝殊の詞也。(八七)

・されとなにか世のありさま 河海、なにかはなにかしかと云心と云々。但されとも読ぎりて何かと詞にいへる事と見えたり。(八八)

○君たちのかみなき 源氏や中將を云也。しかるへき女の世になきをいへり。(八九)

○所せく思ひ給へぬたに 花鳥、所せくはひろき心也。思ひ給へぬはせはき心也。馬頭か世間せはきみにたにかやうに思と也云々。聊相違せるにや。所せきとはせはき心也。上臈はよろつに身をころくしくし給はぬによりて、其身はせはき心也。馬頭なといやしき身は所せはき事なくてみありき侍るに、思ふにかなふ女はなしと也。所せく思ひ給へぬにたにと云にて句をきり、心を上へかけて見共、下へはつゝかぬ詞也。(九〇)

○かたちぎたなけなく 女の種類あるさま也。(九一)

○ちりもつかしと 身をたてゝ潔白なると也。(身ノ字ノ左ニ)かか身か本ウタカハシト傍書(九二)

○文をかけとおほとか 六條院御息所にあたり。おほとか大やう也。(九三)

○ことえり 詞をえらひつくるふ也。(六四)

○又さやかにも見てしかなと 又とは文かきなとほのかなるといふに對していへり。心は文などはかりにてはおほつかなぎに行てあはむとすれば、すへなくまたせてはやく出てあはて幽にあひしらひてものおもはする躰也。又文のほのかなれば又さやかなるをも見はやと待心にや。花鳥、墨つきほのかに書たる文を讀とかむとすれば隙をついやすなればすへなくと云、またせてとは程をふる心也と云々。(六五)

○スヘナク 無便也。無為トモ。(六六)

・わつかなるこゑきくはかり 是よりは木枯の女にあたり。(六七)

・とりなせはあためく とりよりて心みればあたくしくみゆる人あり。(六八)

・はしめのなんとす 第一の難とする也。(六九)

○ことかなかに ことなるか中也。とり分てなといふ也。この段はすゝむをしりそけ退をすゝむる也。(七〇)

○なのめなるましき なをさりならぬ人也。可然女の事をいへり。

又は男のうしろみをなをさりにすましきをも云。(七一)

○をかしきにすゝめる 物の哀をしりなさけにすゝむる、あしきにてはなけれとも実なる所なきはかなければ云也。(七二)

・実々シキハカリナルモ又オソロシキ心也。(七三)

○又まめくしきすちを 是はあまりに実なるうしろみのかたはかりをたてゝ我身をはやさしくもまたざるを云。(七四)

○みくはさみかちに 鬢の髪を耳にはさむ也。とりつくるはすあるにまかせてわか身をもつ也。家とうしはさためる妻也。此女は馬頭ゆひくひし女の類也。(七五)

○ひさうなき ひさうは貧相也。なきにてはあるましきなり。貧相なる也。なきは添字也。此類ノ詞に多シ歟。(七六)

○朝夕のいていり 男の出入也。世間のうきをも、又は外より帰ても何事なとゞ我妻にこそ語りあはせんとするにも、うちとけて其いらへなともしかくとせざるを云也。(七七)

・おほやけはらたゞしき 主人なともちたる人の其身にうちみ有、又傍輩朋友なとにくちおしき事の有時、心ある妻などにはかたりもすへきをと也。(七八)

・思いてわらひ 口惜なと思ふ事ある時也。(七九)

・さしあふき 扇などをさしかさしてゐたる也。(八〇)

・たゝひたふるにこめき 紫上の類。こめき、花におさなまし心と云々。如何。巨の字可然乎。おほとかなる心也。(八一)

・けにさしむかひて見るほとは さしむかひてあるほとはそのけちめもみえざるも、立はなれて男のために何事をもをしはかりさたするかたのなきはあしかるへきと也。(八二)

・おりふしにしいてんわさの 人に物を云つけてさたさするにも、我たらひたる事にてなければ毎事不便なる事おほき物也。(八三)

・つねはすこしそはく 花散里の類也。平生は其かたちなどのよくもなきによりてうちもむかはめやうなれとも、おりふしにつけ

ていてはへする心たてのしかるへきを云也。(二四)

・いまはたゞしなにもよらし 此詞一部<sup>フ</sup>の肝心の由花鳥にしろせり。

・ねちけ 倭人也。(二五)

・物まめやかにしつかに 葵上紫上を人の事にてし皆云也。(二六)

・ゆへよし ゆへくしくよしある也。(二七)

・うしろやすくのとけきに 葵上にあたれり。(二八)

・えんに物はちして 是は伊勢物語の、いてゝいなは心かろしとい

ひやせんの哥よみし女の類也。(二九)

・うらみいふへきをも 匿怨友其人と云かことし。(三〇)

・うへはつれなくみさほつくりて 夕兒のうへの類也。(三一)

・わらはに侍し時 馬頭幼少の時昔物語にさまかへたる女の事など

かきたる草子を見て哀なる事と思ひしを、今思へは結句かろく

しき事なりと也。(三二)

・心ふかしやなと 古今に、我を君なにはのうらにとよみし女の類

也。(三三)

・コトサラヒ 異風躰也。(三四)※

・君か<sup>の</sup>心は 君とは男をいふ也。いまた男のかたからは忘れもは

てぬと也。(三五)

・にこりにしめる 引哥、詞ばかりをとる也。心はうき世にある程

は運淤泥にありて濁にしまぬを、はや世を一たびはなれて又うち

かへる心あるは更に濁にけかるゝと也。(三六)

・あまにもなさて 是は尼にいまたなさてとりかへす也。是もたゝ

おなし物也。(三七)

・われももうしろめたく 伊勢物語に、わするらんと思ふ心のう

たかひにとよみし類也。(三八)

・またなのめにうつろふ なをざりにうつろふ。さやうならん男を

は女も思ひとるへし。(三九)

・心はうつろふかたありとも 男のうつろふ方ありとも見そめし契

りを思ひて堪忍すへき也。(四〇)

・さやうならんたちろき 堪忍せぬ人はかやうの時中も絶ぬへきと

也。(四一)

・なたらかにゑんすへき ゑんすへきをもゑんし、うらむへきをも

一向うらみぬもわるき物也。紫上の類也。(コノ項目、見出ト注

ヲ離レテ記ス)(四二)

・ともかくもたかふへき こゝにて総を決していふ也。(四三)

・我いもつと 此事葵上の様躰によく似たると思ふたれとも。(四四)

・君うちねふり 源もかく思給ゆへ也。(四五)

・物さためのはかせ 朱晦庵、博士とは学官名掌通古今と住せり。

古今ひろく通する心也。(四六)

・よるつの事によそへて 馬頭の詞也。まへくは人の心くをさ

しむきて云もてきて、これより譬をもちて云也。木の道絵所手跡

の三を云也。万の道の中將にいらせたてまつらんため也。政道に

も又かやうの道までもしらはかなふまじきよし也。(四七)

・そはつきざればみ されは左道の心にて、左礼也。此賢人にとら



は人にたはふれ事をこのむ人也。それをも愛するかたにとる也。

(三三)

・大事として 人の本台になるへき人はされはみたりなしたる人はかなふましき也。世にありかたきもの也。(三三)

・又絵所に 是より絵をいへり。着色はまざるゝ事ある也。墨絵いたりて大事也。(三四)

・つきく 上手のになら<sup>ず</sup>てみる也。(三四)

・ほうらいの山 真実をみさる物はさもあるへきと思也。河海、韓非子を引。後漢書張衡伝二モ、画工悪凶犬馬而好作鬼魅、誠以実事難<sup>シ</sup>形而虚偽不<sup>ル</sup>窮也云々。同也。(三四)

・山のけしき 濃淡に山のかさなりたる様に書也。花、金岡山を十五重たゝむと有。(三四)

・けちかきまかき 前裁をいふ也。(三四)

・心しらひ 心つかひ也。是は人の本台たるへき人のさま也。(三五)

・手をかきたる 是は手を云。(三四)

・まことのすちをまめやかに 唐穆宗問筆法、柳公権曰正則筆正云々、乃可法矣といへり。(三四)

・とりならへて見れば 哥道も如此也。かたくしき様なるはきとめにてと、とりならへて見るにみるに見さめのする也。大貳高遠か関の岩かとふみならしとよめるは貫之か関の清水にかけ見えてにはまされりと思しか、後に及はさるといひしかことく也。(二)

四

・はかなき事たに かやうの小技芸たにもあり、何事も実になくてはとて、馬頭申也。源氏君頭中将いづれも世をまつりこつへき人たるへきゆへに世上の有さまをよくしらせ奉らんため也。(四五)

・そのはしめの事 まへにさまくいひしもいまた事たらぬとて、我身にむかしありし事共を引いてゝかたり申也。(四五)

・のりの師の まことに説法の砌にて法を聞くことく也。花鳥、三周説法の事尤おもしろく、惣して此品さためは口にて云までにては無曲也。久しくへたる人などはさまくに思あはする事有へし。

・悉皆世のありさま人くくのうへにあるありさま也。此物語をみるには源氏の時代になりかへりてみるへき也。今の世にあはせて見れば毎事虚誕のやうに覚ゆる也。定家卿恋の哥よまむとてには凡骨をすてゝ業平のおきもせずねもせて夜をあかしてはとよみし時の心にかへりてよめと申されしことく、此時代に心をきてみるへきと也。(二五)

・はやうまた下らう 古今詞書、はやくすみける所にて郭公の鳴けるをとあるは、もとすみこし所と云、其ころにかなへり。(二五)

・きこえさせつるやうに まへにひさうなき家とうしと云し事也。(二五)

(二五)

・まほにも侍らざりし 河海、まほはうるはしく也。まほにあらすとはつるはしからぬと也。真帆也。ほと説也。只まおともよむ也。千載哥に、そなれ木の見なれくゝてむす吾のまおならずともあひ見てしかな。是はまあをのかたへも説なり。又、こぬ人をまつほ

の浦の夕なきに、これもまつとおと説也。(一五)

・わかきほとんすき心ち 真実の本台(妻か)ト傍書とは思はざりし也。されともよるへとは思し也。(一五)

・おいらか なたらかなり。(一五)

・かすならぬ いまた官もあさくて年もわかき我身をは何とてこれ程まではたのみてかくゆるしなくはするそと也。(一五)

・しねむに心おさめらるゝ まごとは自然に心もおさまると也。(一五)

五)

▽アリアウナルヘシ云々、ネタムオリくニ好色心ヲモ馬オサメ

タル也。(一五)

・此女のあるやう 是より本性をいふ也。此人のためとは、馬頭のため女の何とかなと思也。(一六)

・すゝめる すくめると云本あり(右)ニスクメルハ河内本ト傍書。

すゝみ過たる也。又はきこつなき也。女の事也。(一六)

・とかくになひきて 花、男の事と云々。いかゝ。只女の事と也。

(一六)

・人にみえは これこそ馬頭の本台(妻力)と傍書といはれて他人にもなをざりには見えしとつくるひてある也。(一六)

・にくきかた 嫉妬のかた也。(一六)

・あなかちにしたかひ 馬頭か心にはよくしたかひたる人也ければ、

おとしてみん我をはみはなつましき本性也と思ふ也。(一六)

・かくおそましくは 馬頭の詞也。をそぎ也。おそろしき也。(一六)

・かきりとおもはゝ 我にわかれんと思はゝ此程のごとく嫉妬をも

せよ、此まゝにもそひはつへきと思はゝ此心をやめられよと也。

・人なみくにも 昇進をもせはと也。(一七)

・いひそし いひそしとはつよくいひすこす也。(一七)

・よろつに見たてなく 女の詞也。人なみくにもなりといひし詞

をうけて云也。更に人なみくになり給を待にてはなき也。いつ

れかしつほうにあるへきとまてともきはあましましならはわかるへ

き也。(一七)

・あひなたのみ かひなきたのみと也。あちきなき心也。(一七)

・かたみにそむきぬへき とにかくにわかるへきささみかと也。(一七)

七)

・はらたゝしく 前はそらはらをたてゝしかこゝにては実に腹立す

る也。(一七)

・をよひひとつ 小指也。かくかたわにさへなればよろつかひなし

と也。(一七)

・手をおりて 作物語なれば上句をそのまゝ置也。(一七)

・これひとつやは 今これひとつにてもなきと也。(一七)

・えうらみし 女もえうらみしと也。(一七)

・うきふしを こやとはこれや也。(一七)

・まことにはかはるへき 馬頭の心也。(一七)

・りんしのまつり 賀茂臨時の祭也。(一七)

・いみじうみそれふる 艶に余情あるさま也。(一八)

- ・まかりあかるゝ 別也。(二八二)
- ・家ちと思はむ 馬頭の心也。家ちとは室家をいふ也。(二八三)
- ・内わたり 内裏也。(二八三)
- ・けしきはめるあたり 我思物のあるあたりへと思へど、それも夜もふけ侍るよし也。是は木からしの女なるへし。(二八四)
- ・いかゝおもへる 指くひたる女の事也。(二八五)
- ・つめくはるれと はちたる躰也。(二八六)
- ・火ほのかに 面白躰也。(二八七)
- ・なへてきぬとも 綿なといりたるきぬ也。(二八八)
- ・おほひなるこ ふせこなるへし。(二八九)
- ・ひきあくへきものゝかたひら 木丁也。(二九〇)
- ・こよひはかりや 馬頭を待さま也。(二九一)
- ・されはよと されはこそ我を思はずてぬよと也。(二九二)
- ・さうしみは あるし也。(二九三)
- ・おやの家に 留守の女房の云也。折しも今夜おや家に出ぬるよしをいふ也。花鳥 おやの家にありてこよひこれへわたり給、たれを待也と云々。不審。(二九四)
- ・ひたやくもり 無意趣也。このやうたい何とも心得かたきと也。哥なとをよみをかすいかにともいひをかざるをいふ也。(二九五)
- ・我をうとみねと 此程さかなくゆるしなかりしは、我に思ひうとませてよそへ行へきと思けるにこそとまでとあらぬふしをさへ思と也。(二九六)

- ・さしもみ給へさりし 年月はさやうの心とはおほるけにもみさりし事なれ共とおもふ也。(二九七)
- ・われみすてらむ 女のみてん後までを思ふ也。(二九八)
- ・きるへき物 二心あるかと疑たれば、馬頭か衣裳などをしかるへきやうにとゝのへ置也。(二九九)
- ・そむきもせず あり所をかくしもせずかはらす返事する也。とをさかりて尋まとはさせんとせぬ也。そむきもせずとは、河海にしろせるを花鳥破之。只男の尋きたるにうちそむかすあへしらふと云々。可然。又河海の説猶すてかたきかと云々。(三〇〇)
- ・かゝやかし はちかゝやくなと云はたゝはちたる也。馬頭にはちすの心也。(三〇一)
- ・たゝ有しなから 女の詞也。馬頭のこゝろをたにもあらためは帰へきと云也。(三〇二)
- ・さりともえおもはなれし かくはいへとも猶こらさんとてあらたむへしともいはざる也。(三〇三)
- ・つなひきて 女のこらさむとて馬頭のわざとのけひきてよりつかぬ義也。引よせはたゝにはよらて春駒の哥にかけり。(三〇四)
- ・たはふれにくゝ 引哥、女をこらさむとせしはたはふれたるこゝろ也。(三〇五)
- ・たつた姫といはむ 物を染なとする色あひなとも上手也。(三〇六)
- ・たなはたの 物をぬふ事也。(三〇七)
- ・うるさく うるはしきなり。(三〇八)

・中將そのたなはたの(右肩)二第十段ト傍書 中將の詞。たちぬふかたは似ずともなかけ契にあやからせたぎと也。(三〇五)

・あへましは あやかるともなかけ契。たちぬふわさはあへずそありけるの哥にてかけり。(三〇六)

・立田姫の錦には又しく物あらし しく物あらしとは、馬頭か妻の物の色あひなとよくさせける事のたくひもあらしとはほめたる也。

花には手きゝたる女なりとも立田姫にはざりとも及ましきと云々。いかゝとおほえたり。(三〇七)

・はかなき花紅葉 春の花秋の紅葉は造化のしはささへ年によりて花も色なくさき紅葉も色あひしければ露のはへなき物を、まして人のさたしいつる事などは色あひ肝要也とて一段と此女の大切なるよしを中將の云て馬頭に哀をそへ給也。花鳥、おりふしの色

あひはかくしからぬもてなしとは、物えんしのかたのうるさきを云也と云々。如何。(三〇八)

○さて又おなしころ 又物語を二云いたす也。木枯の女の事也。(三〇九)

○うちよみ 哥をよむ也。(三一〇)

○こともなく 無事はほめたる詞也。万事にわたるへし。(三一五)

○このなかもの 指くひたる女を本妻にて也。(三一六)

○えんにこのましき あたしくしきかたの心たのもしかからぬと也。人の心のをしへにいへり。(三二七)

○うちのむへくは 色くしき故に心をとめさる也。(三三〇)

○うへ人 殿上人也。誰ともなし。此人木枯の女にかよへる人なるへし。(三二九)

○大納言の家 此大納言誰ともなし。河海、右馬頭の父と云々。さもあるにや。いかさま馬頭に縁ある人なるへし。(三三〇)

○こよひ人まつらむ 伊勢が、雲井にてあひかたらはぬ月たにもの心也。此上人木からの女に心有て云詞也。(三三一)

▽○雲井ニテアヒカタラハ又月タニモワカ宿スヘキ行方ハナシ。(三三二) ※

○池の水かけ おもしろき詞也。(三三三)

○すのこたつ すのこのやうなると也。(三三四)

○ふどころなりける笛 殿上人也。(三三五)

○かけもよしなど 此あすか井をうたふ心かやかやとりはずへし的心をとる也。(三三六)

○つしりうたふ 式々にうたふはあらてつしりうたふ也。そろうた也。花鳥、文選大人賦云々。嘯ハク吹フクト也(左)ニ只ツ、リシナルヘシト傍書。大人賦は漢書司馬相如か伝にあり。文選とあるは誤也。(三三七)

○よくなるわこむを 内にて女のしらへたる也。(三三八)

▽・ケシウハアラス コハ大カタニハアラストノ心也。(三三九) ※  
○律のしらへ 飛鳥井も律の哥也。律は秋也。又律は陰なれば女のかた也。時節神無月なればおりにあへるなるへし。(三四〇)

○いまめきたる物の 和琴をいふ也。(三四一)

○庭のみみち 秋はきぬ紅葉は宿にの哥にてかけり。ねたますと云

詞は心得かたき歟。ふみわけたる跡のあらんこそたれかかよひつらんとねたむ理なるへけれ、されとも是は此女の所へ別の人がよふときゝていへる也。かよふ人はありとも、かやうの紅葉なとをも我こそ尋まいりてみはやし侍れと也。此心にてねたますの心きこえたり。(三三)

○このねも月も 月を菊とかきたる本あり。いつれも面白。えならぬとはたゝならぬと也。つれなき人とはさためて待人あるへしと也。されと我ならて誰か紅葉をふみわけてきつると也。(三三)

○わろかめり かく女と哥よみかはすは人めわるぎと也。又儀は哥のわろき也。此義可用にや。(三四)

○きゝはやすへき 馬頭をいふ也。(三五)

○木からしに 前の哥は別に待人あるへしとよめるを、こゝにはつれなき人をは此うへにしなして、我身かすな。ちては引とゝむへきことのはもなきと也。(三五)

○にくゝなるをも 女のかくいひかはすを馬頭の間にくゝ思ふ也。(三六)

○かとなきにはあらねと 一かとなきにてはなけれとも。(三六)

▽○たゝ時くうちかたらふ 時くのかたらひ人にてはかやうにても子細なきと也。大かたの物と実まことに用へきとの差別也。前より皆此心也。(コノ項目前項二続ケテ記ス。朱圈点合点アリ)

(三五)

○このふたつの事を わかき時さへ口惜思ひしに、まして今は心もとまらずと也。(三四)

○御心のまゝに 頭中将などの御心のまゝならば「かくあたる事をこそおもしろくおほしめさめと也。秋の露玉篠のあられ引哥にをよふへからす。たゝ」あたる心なるへし。(括弧内脱落ナルベシ)(三四)

○あへかなる ひわつによはき心也。(三四)

○いま七とせあまり 馬頭源氏よりも七歳はかり兄と云儀歟。只七は大かすをあげて今ちと年もかさなりて思ひしり給ふへきよし也。(三四)

○いつかたにつけても 源氏の御心也。おはさうすはおはしますと也。(三四)

○しれものゝ物かたり 花鳥、しれ物はされものと云々。いかゝ。萬葉浦嶋長哥に、世中のしれたる人といふに癡カキの字を書たり。こゝは夕兒の上の事也。彼性をろかにて癡なるかたある人也。癡の字尤可然。又左伝十三成十八年伝無患シテ不弁二菽麦一故不可立。注云、不患シテ所謂白癡。(三四)

○さても見へかりし なにとなくはしめてあふ人人の心につく也。此まゝも見たく思ふ也。(三四)

○なからふへき 行末とをくとまては思はさりし。(三四)

○うちたのめる 女もなれ行まゝにうちたのむと也。(三四)

○たのむにつけては たのむにつけてはうらむへき事をもうらみて

こそあれ匿怨ところある也。(二四六)

○あさゆふにもてつけ 此夕兒上はとたえあるをもうらむるやうにもなかりしを、それさへ結句心くるしき也。(三五)

○おやもなくて おやは三位中将なる人也。夕兒の巻に見えたり。

(三五)

○さらは此人こそは おやもなき故に此中将をたのみ所におもはるゝ也。(三五)

○此見給ふる 頭中将北方二條大臣の四君かたよりおとしかけたる

事のある也。(三五)

○むけにおもひしほれ 夕兒の上也。かやうの事をも露ほとも中将には申されさりし也。(三五)

○おさなきもの 玉かつら也。(三五)

○さてその文 源氏のとひ給也。(三六)

○いさやことなる 優なる詞也。はゝかりての給さる也。ことはなとにて人のほと人の心も見ゆへき故也。さて答給ふに心つかひおもしろき也。(三五)

○山かつの 哀なる哥也。あるともとはあるゝとも也。我身こそ山かつのごとくあれたりとも、卑下の心也。下旬は玉かつらの事にかけたり。哀はかけよと中将をかこつなり。なてしこはそなたの御子なれはとひ給へと也。(三五)

○れいのうらみもなき 夕兒の心くせ也。(三五)

▽○あれたる家の あはれふかきさま也。(三六)

▽○むかし物語 当時此家の跡をみていふ也。古物語にをよふへからざる也。(三六)

○さきまじる さきまじる花とは秋の庭のさま也。其中に常夏は今

女のたとへて云也。夕兒上をなくさむる也。しく物そなきとはほむる心也。又床の縁もあるへし。秋の七種の中にとこなつは其一

ツ也。(三六)

○ちりをたに 子よりもさき母の心をとる也。夕兒上をこそ思へと也。(三六)

○うちはらふ 夕兒上の哥也。嵐吹そふとは、下心は二條大臣方はけしき事のきこえくると也。おもては只中将をうらみて説也。(三七)

(三七)

○はかなげに 悉皆はかなげなる性也。(三五)

○あはれと思ひし 我身のとたえをくをもうらむるけしきもあらはかくはあるましきと也。(三六)

○なてしこ 玉かつら。(三六)

○つれなくてつらしと 色にはみせすして此女のつらしと思をははしらすして哀と思ひしは益なきかと思ひ也。(三六)

・いまやうく 我はやうくわすれんと思ふ時分には思ひ出事もあるへきと也。(三六)

○されはかのさかな物 これより又馬頭詞也。さかな物は指くひし女也。花鳥には中将の詞云々。(三七)

○琴の音の 木枯の女也。(三七)

○この心もとなき 夕兒上也。(二七)

○なんすへきくさはひ 思ひのまゝなる人はなき也。(二七)

○ほうけつき 仏法くさき也。(二七)

○くすしからん くすみたる也。是より以下みな狂言に書也。(二七)

○式部か所にぞ 藤式部也。(二七)

○しもかしも 式部か詞也。(二七)

○かの馬頭の申給へる まへに朝夕のいていりに付てもおほやけわたくしの人のたゝすまひよきあしき事のためにも耳にもとまる有さまをうとき人にわざとうちまねはんやなどいひしやうとなり。

(二七)

○さえのきは 才のかきり也。花、才の伎と云々。如何。(二七)

○なまゝのはかせ 才覚のある女也。(二八)

・我ふたつの道 文集秦中吟、花鳥に見えたり。儒者なるによりてかくいへり。(二八)

○こしおれふみ こしおれ哥などかごとし。折腰躰まではゆかぬ事也。(二八)

○はかなし口おし 藤式部か詞也。女を或ははかなし、或はくちおしなど思へと、宿世にまかせてあれば、男はしさいもなき物と也。すく世のひくかた待ぬれはと説切て、をのこしもといふよりおこして見る也。大かた男子はやすき物也と也。花鳥義は上へつてひとつにみる也。おのこのためしさいなきと云々。いかゝ。(二八)

○こころはえなから すかしてかたらせんとし給と心えなから也。

(二八)

○ふすふるにや 久しくまからざる故かと思也。(二八)

○又よきふし 式部か心にはれも子細なきと思ふ也。(二八)

○ふひやう 腹痛也。(二八)

○こくねちのさうやく 土用のひるなど云て薬に用る事の有也。(二八)

八)

○いらへに何とか 何と返事をいふべきよしもなければ也。(二八)

○この香 女の詞也。(二八)

○きゝすくさんも 式部也。(二八)

○ざゝかにの この香うせむ時にといふとかめていへる也。我來へ

きよひとまたすして此香うせて後にとあるは、もしあらぬかこつけこともやあるといひかくる也。蒜を昼によせたり。(二八)

○あふ事の 不断たちぞふ中にてあらはひるまをまてともいはすあふへきを、たまさかなる故にかやうなると也。面白哥也。まはゆきはつかしき也。(二八)

○いつこの女 さやうなる女はよもあらしと也。(二八)

○おいらかに まことに也。花鳥、まめやかにと云々。同心也。真成とかく。まめやかまごこのこころ也。(二八)

○さふらひなんやとており おりは居也。(二八)

○すへて男も女も 爰にて惣をくひもて馬頭の批判する也。(二八)

○しれるかたの事を 此以下悉皆人のをしへを書也。しりたる事も思はせてをくよき也。あまりに才覚たてをするあしき事也。(二八)

六

○三史五經 紫式部か云也。大かたにしてこそよからめと云てをきて、又されともあなかに書にたてゝならはすとも世にある事をしてはくちおしきと也。(三九)

・さるまゝに さありとてこれか又うたてき事也。(三〇)

・かきすくめたる 一本すゝめと有。(『細流抄』八「すくめ」下「す

ゝめ」并逆(三〇))

・心ちにはさしも 真名にと云物は心のやはらかなる事をこそよみなせはこはくしくきこゆる也。(三〇)

○哥よむと思へる 哥よむへき人のをしへ也。はしめからそれにまつはれたるはあしきと也。(三〇)

○五月のせち 花鳥。(三〇)

○いそぎまいる朝 えならぬはえんならぬ也。今日はおりにあひてえんなるへき事なれ共、節会などにまいる人はおりふしのいそがしきに哥などもよみかくるは心つきなきと也。(三〇)

○いとまなきおり かやうのおりふしに菊の露をかけ哥よみかけなとするはつきなき事にてはなれとも、心つきなき事也。【時節ををしはかりてあるへき事也。】(括弧内脱落力)定家卿詠哥大概にも時節の景気世間の盛衰とかゝれたる也。こゝもとに心ををかざるは、いかなる秀逸をよみ出すとも心のへたなるへし。(三〇)

○さならても 哥よみかけなとするは老後の哀にもなるへきを、つきなきときよみかくる当座は心をくれに見え侍り。哥よむ人のを

しへ可然云々。(三〇)

○よろつゝの事になとかは などかはといふにて句をきるへし。(三〇) ○さてもおほゆる 後に思へはの句にかゝる也。時節の機嫌を分別すへき事と也。こゝに心ををかはめやすかるへきと也。花には、

分別なき人の心にて斟酌したらんはめやすかるへきと也。されとも唯用捨あるへき事と見るへき也。(三〇)

○すへて心に 殊勝の詞也。心をつくへし。(三〇)

○君はひとり 君、源氏也。人ひとりとは藤壺の御事也。さまくの事をきくにもたくひなく思出らるゝと也。(三〇)

○いつかたによりはつとも 此品くいつかたに一定するともなくてあけはつる也。(三〇)

○からうして なか雨はれまなきと前にありしにかゝれり。なか雨のはるゝけしきからうしてといへる、まことにさる事也。(三〇)

○日のけしきも 此もの字にて御忌もはて雨も晴たるを見せたり。(三〇)

○おほとのゝ御心 おほい殿といふ本もあり。葵上の父おとゝ也。同事也。大殿の御心には源氏をいかにしても里すみをせさせたまつらんとおほすゆへ也。(三〇)

○おほかたのけしき 葵上の有様也。是こそ上品の人とも云へきかたち也。(三〇)

・御有さまのとけかたく あまり実めなるを源氏わかき心に難と思給也。(三〇)



○さうくしくて さひしくて也。(三二)

○中納言 中務の 兩人装束の御かたにさふらふ人也。源氏の思ひ人也。花鳥。(三三)

○あつさにみたれ給へる 源の御様也。雨の晴間一入の暑気なるへし。(三四)

○おとゝもわたり 源の御出ある故にわたり給へり。(三五)

○うちとけ給へれば あつさにみたれ給御さまなれば、木丁を隔てまします也。礼をいたさるゝ義也。(三六)

○あつきにと 源のくるしと思給也。(三七)

○あなかま あなかしかまし也。このやうたい帳をへたてゝ対面とみえたり(右ニカシカマシ山ノシタ行サ、レ水アナカマカレモ思フ心アリト傍書)。(三八)

○なか神 中央の儀にて中神とも云、又長神とも云也。両儀也。天一神の事也。内裏より天一神の方にあたると也。(三九)

○さかし けにさそと也。(四〇)

▽〇れいはいみ給 いつも忌給方也。(四一)

○二条院 河海、花、種々沙汰あり。いつれにても敷。但柵巻にいたりて用處有。花鳥の儀しかるへし。(四二)

○いとあしき事 此方違(写本)ト傍書に御出なくてはあしきと也。(四三)

○中川 花、栄花物語を引、尤かなへり。中川とは、賀茂川は東、桂河は西、京極川は中央にて、中川也。(四四)

○なやましきに 源の詞也。門外より下車する所はわつらはしきと也。(四五)

○しのひくの御かたゝかへ 源の思人のある所は自然いつくにもあるへき也。されとさやうの所へはえ出給はさる也。久しく内裏にさふらひてたまゝ御出ありて、又さやうの方へははゝかりあると也。源氏の心つかひしかるへし。(四六)

○きのかみおほせこと給へは 今夜御出あるへきと仰らるゝ也。(四七)

▽・ウケタマハリナカラ 承ツゝ也。(四八)※

○伊与のかみ きのかみか父也。(四九)

○なめけ 無礼也。(五〇)

▽〇その人ちかゝらん 源の詞。女ちかくあらん所こそこのましかれ也。(五一)

○けによろしき さふらふ人たちの申也。(五二)

○おとゝにも あるしのおとゝにも也。俄の事なる故也。(五三)

○風すゝしくて 夏の末つかたの躰おもしろく。花鳥、此時節をなか雨より悉皆六月と有。此虫の声などゝあるをもて六月とある敷と也。只月も有明にても有程に、五月の末なるへき敷。(五四)

○人く 御ともの人く也。(五五)

○あるしもさかなもとむ 風俗哥に、あるしもさかなもとめにこゆるきのいそにわか<sup>たて</sup>なかりあけなとゝあり。このあるしは紀伊守なるに、此詞妙也。(五六)

○かの中のしなに 前のしなさまため中のしなさまためにそをくへき。すりやうといひて人の国にかゝつらひてなとゝいひし事を此家のありさまを源の御覽しておほしめしあはする也。(三三三)

▽○おもひあかれる 空蟬をは父の内へまいらせんと思ひし人也。

(三四)

○きぬのをとなく 夏はみなすゝしをきるへきに音はあるましきといふ説あり。いりほがなり。夏もひねりかさねとしたのかさねはいたひき也。音あるへし。又はかまもいたひきなればをとなくはかなふへからず。(三四五)

○かうしをあけたり 女のあるかた方のかうし也。夏なれば如此。

紀伊守聊尔也とおろさする也。(三四六)

○むつかりて 日本記、發憤とかける。(三四七)

○さうしのかみより 障子の紙也。ひかうの心なるへし。(三四八)

○このちかきもやに 女共也。(三四九)

○よすかさたまり 葵上のさたまり給ふを云也。(三五〇)

○されとさるへき さはあれとも御しのひありき常にあると也。(三五)

(五)

○おほす事のみ 藤壺密通の事也。(三五三)

○式部卿の宮のひめ君 桃園式部卿宮の御女權齋院也。是よりさきに此事なし。初て書出し侍り。前にありつることく心得へし。此

類此物語の格也。かたらさる也。(末尾ノ一文、次項末カラ続ク

(三五)

○ほうゆかめて 圓は方にはしまる物也。歌を正躰にも(前項末ノ

「かたらさる也」ニ続ク)。(三五)

○くつろきかましく 源氏のたちぎゝをもしらずして、ひまありて

くつろぎたる様なる也。「是も女の要心あるへき事のをしへ也。」

(括弧内脱落力)(三五五)

○とはり帳 源の詞也。催馬楽我家の哥に、我家は戸はり帳をもちたるを大君きませむこにせん、(そのツケニヲ補入みさかなはなによけん、あはひさだいかせよけんなど云詞なり。今源氏の給心は今夜可然御そひふしをまいらせよと也。(三五六)

○なによけんとも 此下詞をもて何よけんといふ也。可然女もあり

かたきと云。(三五七)

○はしつかたのおまし 源氏も仮に寝給也。(三五八)

○あるしの子とも 紀伊守の子也。(三五九)

○伊与のすけの子 是は紀守か弟也。(三六〇)

○十二三ばかり 空蟬の弟小君也。(三六一)

○故衛門のかみ 空蟬の父也。(三六二)

○あはれの事や 源の詞。(三六三)

○まうとの 真人也。かはねをよび給也。朝臣やなといへるにおなし。(三六四)

○のちのおや 継母也。然は空蟬は紀守継母かと尋給也。(三六五)

○さなん 紀守申也。(三六六)

○にけなきおや 源の詞。(三六七)

○宮つかへに 父は空蟬を宮つかへに出さんと申せしと内にも仰あ

りし也。何とて受領の妻になしたるぞ、あはれの事やと也。(三六〇)

○ふいにかく 紀守申也。(三六九)

○いよのすけは 源の詞也。(三七〇)

○君とこそ しようこそ思ふらめと也。(三七二)

○いかゞはわたくしの をしいたしてしうといはんは源の御前にて  
ははゝかりある故に私のといふ尺をもしろうし。いかゞはと句を切  
て読へし。(三七七)

○すきくしきこと われらを始めて無益なる事と申と申也。(三七三)

○ざりともまうとたち 源の詞。(三七四)

○つきくしく 紀守よりは伊与の守はさやうの處はよしはむへき  
也。(三七五)

○おろしたてんやは 紀守もすき物なれば伊与の介も心をはゆるさ  
しと也。(三七六)

○いつかたに 源の尋給也。(三七七)

○みやしもや 紀守詞。しもやは雜會なと也。(三七八)

○ゑいすゝみて 源の御ともの人く也。(三七九)

○ありつる子 小君也。(三八〇)

○ものけ給はる 物うけ給る。(三八二)

○かれたる声 此子のかれたるこそにて空蟬にいふ也。(三八三)

○こゝにそふしたる 空蟬の詞也。(三八三)

○いかにちかゝらん 源の御寝處へいかにちかゝらむとおもひしに、

さもなくてうれしきと也。(三八四)

○いとよくにかよひたれば 小君と空蟬とこそよく似たると也。(三八五)

△

○いもうとゝ あねをいもうとゝいふ也。系図にも姉なれ共女子  
をは末未につる類也。(三八六)

▽○ひさしにも 小君か詞也。花、女房達の詞云々。如何。(三八七)

・おとにきゝつる 源氏の御事を小君のかたる也。(三八八)

・ひるなちましかは 空蟬の詞也。(三八九)

○ねたう心とゝめても 源の御心也。ちと我うへを心とゝめてもと  
ひきけかしと也。(三九〇)

○まるははしに 小君か詞。と。(三九一)

○女君はたゝこの 源此声をきゝて推し給也。障子は寝殿の母屋の  
南面(と北おもて)(括弧内脱落力)との中をへたてたる障子也。

すちかひたるは、今夜源氏の寝所は南面の方也、空蟬の方は東也。

今源氏の方よりすちかひなるへし。(三九五)

・中將の君は 空蟬のめしつかふ女房の名也。(三九三)

○もとめつる 中將の君と思と也。(三九四)

○中將めしつれば 源氏当官中將也。中將の君はいづくにぞと尋し  
をきゝ給し程にかくの給へり。とりあへすよき詞也。(三九五)

○うちつけに 源の詞也。うちつけなるやうにこそ思はれ、我は年  
月のおもひあるによりてこそ今夜の方たかへもありつれととりあ  
へすの給也。(三九六)

○あさましく 空蟬の詞也。(三六)

○たかふへくもあらぬ 源の詞也。(三九)

○もとめつる 中将の君也。(三九)

○やとの給 此中将を源氏のめしよするさま也。(四〇)

○あやしめて 此中将也。(四一)

○思ひよりぬ 源氏にてましますと思ふ也。(四二)

・とうもなく うこきもし給はぬ也。(四三)

〔考 察〕

帚木卷の書入れも、桐壺卷と同様、基本的に『細流抄』の注釈を『紹巴抄』の当該項目の上部欄外に丹念に書き写したものである。ただし、桐壺卷の書入れは巻全体に及んでいたが、帚木卷は巻首から64丁表までで、全体の八割方進んだところでとぎれている。何らかの事情で書入れ作業を中止してしまつたのだろう。

桐壺卷と同様に、『細流抄』による書入れは漢字平仮名混じりで記されており、それとは別に片仮名混じりで記される別筆とおぼしき注が存在する。片仮名の注はやや低い位置に記されることが多く、文字も少し小さい。

まず、平仮名書きの注を伊井春樹氏編『源氏物語古注集成』『内閣文庫本細流抄』に翻刻された本文と比較するに、帚木卷において書入れ注に存在しない『細流抄』の注は、次の五箇所八項目である(引用末尾の数字は、内閣本の翻刻に付された項目番号である)。

①「なのめに」(二六)と「かならずしもわかおもひにかなはねと」(二七)の間

すきくしき心 あなからすきくしき心ならねと心になふやうもやとえりそめてはさためかたきと也。天然の縁にまかせてきくへき事也。(二七)

②「なたらかにおんすへき」(三三)と「ともかくもたかふへき」(三三)の間

みる人から みる人は女の事也。男の心も女からおさまるへき也。(三三)

あまりむけに 女の男をあまりさしゆるすもあしきと也。千里万里の舟をいささかの質にて繫をく如に男の心をも女の心にて繫とむへきと也。(三六)

つなかぬ舟 鶺鴒賦、河海。(三五)

さしあたりて 花、第七段馬頭詞<sup>マカ</sup>。いかゞ。是よりは頭中将の詞也。男のうへにみる説あれとも、唯女にみるよき也。臚

月夜の類也。(三三)

③「我ふたつの道」(二六)と「こしおれふみ」(二六)の間

おやの心を 物をならふ師なる故におやの心をはゝかると也。

(三七)

④「ふいにかく」(三六)と「いよのすけは」(三七)の間

女のすくせ 世間の不定のうちにも女は一段はかなきと也。(三

三六)

⑤「中将の君は」(三五)と「もとめつる」(三五)の間

うへなるきぬやるまで 源氏也。(三五)

これらの項目は書入れ者が見た『細流抄』にはなかったのか、それとも書入れの際に不注意から脱落したのか定かではない。

逆に、内閣文庫本『細流抄』にない項目で、書入れ注にあるものとして次の一例がある。書入れ者が見た『細流抄』にはこの注が存していたのであろう。

○おほとのなら 又はおほとのおふら。いかさまにかいてもよむ時はとのふらとよむなり。(二七)

書入れ注には、目移りによる脱落のため、項目が落ちたようになっているところが一箇所ある。

○片野の少将には 給けんかしといふまで物語の作者の惣論也。

かた野の少将説々あり。物語の名也。清少納言枕草子にも見えたり。心は、片野の少将は天性好色をうへからたつる人の事也。

此源氏の君は当官中将也。給し、此し文字は過去のし文字にて

は聊心得かたき様なれと当代の事をも如此書事常の事也。(四七) 書入れ注はこのようにあるが、これは、「此源氏の君は」の後に、

うへはさはなくてしたに好色の心あると也。

○また中将などに こゝより双紙の詞也。今源氏は

が脱落したため「また中将などに」の項目(三五)が前半部分を失って埋没した形になっているのである。

片仮名書きの注は、葺木巻には全部で十例ある(三五・三六・三五・六・

三三・三四・三五・三三・三四)。うち一例(三五)は平仮名書きの項目に続けて書かれている。これらの注の典拠は不明だが、『源氏物語』の本文

を項目として掲げて注釈を記す形のもので、そうでないものが混在しており、また(三五)のように同じ「そへに」という語に関する注を二箇所に分けて記すものもある。

のである。ある特定の書物から引用したものではないようだ。「八雲抄」(三五)や「祇注」(八三)なるものを引いた注があるのも興味深い。また、引歌の引用もある。「雲井ニテアヒカタラハ又月タニモワカ宿スキテ行方ハナシ」(三三)がそれで、これは

『紫明抄』『異本紫明抄』『河海抄』『孟津抄』『岷江入楚』などが引歌に指摘する『拾遺集』(巻八・雑上・四三七)の伊勢詠である。

片仮名注は平仮名注の行間や傍書にも見えており、それらにもなかなか興味深いものがある。二の傍書「力か身か本ウタカハシ」は、

書入れ者が見た『細流抄』の「身」の字が判読し難かつたことを注記

したもので、三三の傍書「字本」は、「遵」の字に疑問を抱いた

書入れ者が本の通りに写したと断つたもので、二の傍書「スク

メルハ河内本」は異本に言及したものであり、三三には「カシカマシ山ノシタ行サ、レ水アナカマカレモ思フ心アリ」(『金葉集』巻八・恋下・五〇五・読人不知)の和歌を傍書する。これは項目「あなかま」

の例歌を記したものだ、主な古注釈書に指摘のない歌である。

なぜ途中でとぎれたのかはわからないが、葺木巻の書入れを見て、そこにはかなりレベルの高い勉強の跡が見てとれるのである。

——せのお・よしのぶ、広島大学大学院文学研究科助教授——